

第3章 総合的な学習の時間のカリキュラム評価の実際

普通科高等学校における総合的な学習の時間のカリキュラム改善

- 1年生「先輩に学ぶ」のカリキュラム評価を通して -

佐賀県立鹿島高等学校

1 研究の取組

(1) 学校の概要

本校は、県南部に位置する鹿島市の旧鹿島鍋島藩の旧城内にあり、今年度で学校創立107年目を迎える全日制普通科高等学校である。生徒数674名（普通科14クラス、普通科理数コース3クラス）の中規模の進学校であり、昨年度は、国公立大学に110名余り、私立大学に160名余りが合格した。

本校では校訓の下に、更なる躍進を目指すため、表12に示すように、本年度は教育理念である「赤門学」（「赤門」とは、佐賀県の重要文化財であるとともに本校の校門であり、在校生・卒業生の精神的支柱でもある）を策定して、その実現を図るよう努めているところである。

表12 校訓と教育理念「赤門学」

<p>【校訓】 「校訓・本校の教育目標『至誠・自律・創造』の精神を基調に、人格の完成をめざして個性の伸長に努めるとともに、心身ともに逞しく、豊かな知性と情操を備えた、国家及び国際社会の発展に貢献できる人材を育成する」 至誠・・・誠実に生き、人のため社会のために尽くす。 自律・・・自らを律し、心身共に逞しく自己の成長を図る。 創造・・・知性を磨き、課題に挑戦し未来を自ら創り出す。</p>			
<p>【本年度の教育目標（「赤門学」における教育目標）】</p>			
<p>他者を尊重して共に生き、未来を切り拓いていく意志と能力を持った生徒を育成する。</p>			
3年間を見通した計画 （目標活動の例）	1年生 赤門学の醸成 （自分を知り、社会を知る）	2年生 赤門学の深化 （自分を磨き、志を抱く）	3年生 赤門学の飛躍 （進路を決め、はばたく）
「将来への設計図を描く」 赤門学	進路啓発事業 「先輩に学ぶ」	進路啓発事業 「佐賀大学ソノチニシ」	進路啓発事業 「大学別講演会」
「自ら学び、挑戦する」 赤門学	基礎学力の定着	学力の向上	学力の完成
「人としての生き方を身に付ける」 赤門学	社会性の育成	人間性の向上	人格の陶冶

(2) 本校における総合的な学習の時間の取組

本校では、平成12年度より、教育課程に総合的な学習の時間を導入した。以来、この時間を「生き生きハイスクール21」推進事業の目標と関連付けながら、生徒一人一人が、自分の進路希望や関心に応じて、テーマ・探究すべき課題を設定して研究活動を進め、その成果を発表する活動を行ってきた。この時間の「目標」としては、生徒の「生きる力」の育成を挙げている。本校での「生きる力」とは、その時々状況を一人一人が主体的に考え、判断し、行動するなど、自ら問題を意欲的、積極的に解決する力の育成を表す。本校の生徒は、精神的に安定はしているものの、物事に意欲的に取り組んだり、積極的に意見や感想を述べるのが少ない。日常の学校生活の中においても、休み時間を除けばほとんど発言しない日々を送る生徒が少なからず存在する。これは発言のみに留まらず、行動面においても同様である。そこで、この「生きる力」としての主体性、積極性を実現するため、1年次では単元「先輩に学ぶ」を「学習内容」の1つとし、本研究の対象とするとともに、実施したカリキュラムの問題点を明らかにしてカリキュラム改善の方策を探ることとした。

2 単元「先輩に学ぶ」のねらい及び評価の観点・規準

本校の教育目標、「赤門学」の理念に基づいて、単元「先輩に学ぶ」のねらい及び評価の観点・規準を表13のように設定した。なお、「先輩に学ぶ」は単元としているが、実際には、1年生の前期に総合的な学習の時間としてこの「先輩に学ぶ」を実施している。しかし、ここでは3年間を1つのカリキュラムと考え、その単元として「先輩に学ぶ」を設定した。

ここではまず最初に、表13の「(1) ねらい」を実現するために「(2) 評価の観点」を5つ設けた。「ア 職業に関する関心・理解の深化」「イ 自主的・創造的な活動意欲・能力」については、「(1) ねらい」の「社会の第一線で活躍されている本校の先輩を訪問し、様々な生き方や考えを意欲的に理解しながら、自分の進路に対する自覚を新たにする」という部分の観点となっている。「ア 職業に関する関心・理解の深化」については自分の志望する職業の理解を、「イ 自主的・創造的な活動意欲・能力」については、その職業に対して意欲的に自らどうかかわるかという創造的態度を期待して設定した。「評価の観点」の「ウ 礼儀作法や社会常識を踏まえた態度」は高等学校学習指導要領の「総合的な学習の時間のねらい」の「自己の在り方」の実現を目指すものである。これは、特に高等学校においては必要であると考えている。観点の「エ 学習・活動内容をまとめ、発表する意欲・能力」「オ パソコン・ワープロ活用技能」は、「(1)ねらい」の「その場に応じた適切な表現をすることができる」という部分の観点となっている。これらは、その場に応じて適切に、より良い手段での確に生徒が表現することを期待して設定したものである。なお、評価の規準は、各観点に基づいて生徒の学習活動をきめ細かく見るために、より具体的なものを設定した。

表13 「先輩に学ぶ」のねらい及び評価の観点・規準

(1) ねらい	社会の第一線で活躍されている本校の先輩を訪問し、様々な生き方や考えを意欲的に理解しながら、自分の進路に対する自覚を新たにするとともに、その場に応じた適切な表現をすることができる。
(2) 評価の観点	ア 職業に対する関心・理解の深化 イ 自主的・創造的な活動意欲・能力 ウ 礼儀作法や社会常識を踏まえた態度 エ 学習・活動内容をまとめ、発表する意欲・能力 オ パソコン・ワープロ活用技能
(3) 評価の規準	ア-(ア) 自分の将来の職業について関心をもっている。 (イ) 志望する職業の内容を理解しようとしている。 (ウ) 志望する職業に就くためにどのような技能・資格等が必要か調べる意欲がある。 (エ) 技能・資格等の習得のために、どのような進路を選択すべきか考えている。 イ-(ア) 訪問先の職務内容に関心がある。 (イ) 自分の進路を考えるために、先輩を訪問して質問したいという意欲がある。 (ウ) 先輩にどのような質問をするか考えることができる。 (エ) 訪問する先輩にアポイントメントを取ることができる。 (オ) 集合時間・場所、交通手段等の計画を立てることができる。 ウ-(ア) 電話での打合せ等でどのような言葉遣いをすべきか配慮できる。 (イ) 訪問時にどのようにあいさつをしたり、どのような礼儀が必要か配慮できる。 (ウ) 訪問願いや礼状を発送するに当たって、事務的な処理がきちんとしてできる。 (エ) 礼状等で、感謝の気持ちを伝えることができる。 エ-(ア) 訪問先の職務内容に関心がある。 (イ) 職務に必要な資質・能力・心構え等が理解できる。 (ウ) 訪問の成果を報告書としてまとめることができる。 (エ) 報告書の内容を積極的に発表しようとする意欲がある。 (オ) 報告書の内容を聴き手に分かりやすく発表することができる。 オ-(ア) C A I教室利用の手順を理解し、コンピュータの準備・起動ができる。 (イ) コンピュータのデータ保存・終了・片付けがきちんとしてできる。 (ウ) ワープロソフトを使って、訪問願いの文書を作成することができる。 (エ) ワープロソフトを使って、礼状を作成することができる。 (オ) ワープロソフトを使って、訪問報告書の文書を作成することができる。

3 活動の実際

(1) 「先輩に学ぶ」活動計画及び評価

「先輩に学ぶ」は、今年度より初めて取り組む活動である。平成12、13年度の2か年は、1年生を対象に様々な職業の方々に来校していただき、生徒が主体的に選択した講座を聴講することによって生徒の進路意識の高揚を図った。今年度は、より充実した体験活動とするために、生徒自らが本校の卒業生を職場に訪ねていくという方法に変更し、その準備作業も含めて総合的な学習の時間で取り組んでいくこととした。

表14に示すように、実際に先輩を職場に訪問する時期は7月下旬である。それまでは毎週の総合的な学習の時間に準備作業、ワープロソフトの練習などを行う。7月の訪問後は、各個人・グループで感想文の執筆や報告書の作成を行い、クラス発表会や文化祭展示を行って、「先輩に学ぶ」の活動は終了する。評価に当たっては、表13の「『先輩に学ぶ』のねらい及び評価の観点・規準」に基づき、それぞれの学習活動に対応した観点と規準を設けた。

紙面の都合上個々に明記することはできないが、「学習内容」が変われば、それに応じて「活動の場」も変わる。例えば、ワープロソフトを利用した訪問計画書、訪問願、礼状、取材報告書などの作成法を教える場合はCAI教室を使用する。最も時間を掛けて検討したのは校外での活動であるが、「訪問計画書」などの提出や途中の危険地区の提示などについては様々な手立てを考えてこれに対処した。アンケートの記入は教室でも構わないが、最初の「企業・施設訪問のガイダンス」などは、全体説明となるためにスペースの広い体育館などを使用した。

また、本研究委員会でも示されたとおり、教育機器（OHP、コンピュータのソフト等）を利用した「クラス発表会」も想定されるので、どのような機器をどのように用いたかも評価の視点として考えた。

「生徒」については、訪問する時にグループ（班）分けをして実施したので、その対処法としてグループの「訪問計画書」「取材報告書」を提出させ、更に自己評価や相互評価をさせて各自の長所を生かすようにした。

「授業者」は、学校での活動においてそれぞれに適した教師を割り当てたが、職場訪問の際は「授業者」が訪問先の先輩となるので、教師は観察者となる。また、訪問先がそれぞれ異なるために、評価の対象を主に取材報告書とした。

表14 「先輩に学ぶ」活動計画

日程	学習活動	観点及び規準	評価方法又は対象
4/19(金)	(企業・施設訪問のガイダンス)将来の夢の模索	ア-(ア)(イ)	アンケート
4/26(金)	「進路と職業について」の研究	ア-(ウ)(エ)	進路ノート
5/10(金)	CAI教室の使い方、ワープロソフトの利用	オ-(ア)(イ)	観察法
5/17(金)	CAI教室の使い方、ワープロソフトの利用	オ-(ウ)(エ)(オ)	観察法
5/24(金)	計画書・訪問願・礼状・報告書等の作成練習	オ-(ウ)(エ)(オ)	提出書類
6/7(金)	訪問希望先の希望調査(ワープロソフトの練習)	イ-(ア)(イ)	アンケート
6/14(金)	(班、訪問先の発表、役割分担決定)訪問計画書の準備	イ-(ウ)(オ)ウ-(ア)(イ)	訪問計画書
6/21(金)	アポイント法の練習と実施、訪問計画書作成	イ-(オ)(カ)ウ-(ア)(イ)	面接法・訪問計画書
6/28(金)	訪問計画書の清書(訪問願いの作成・発送)	ウ-(ア)(イ)(ウ)	訪問計画書
7/5(金)	各班での日程作りを中心とする最終打合せ・準備等	イ-(オ)ウ-(ア)	観察法
7/12(金)	礼状の書き方練習(グループ取材報告書の配布)	ウ-(イ)(ウ)	礼状
7/22~26	午後から職場訪問を実施、礼状の作成	エ-(ア)(イ)ウ-(エ)	自己評価法・礼状
7/27(土)	「個人の感想文」作成(グループ取材報告書作成開始)	エ-(ア)(イ)(ウ)	「個人の感想文」
7/31(水)	取材報告書提出締切(礼状<感想文・報告書を含む>発送)	エ-(イ)(ウ)ウ-(イ)	取材報告書
8/下旬	クラス発表会	エ-(エ)(オ)	観察法
9/7(土)	文化祭での報告書展示	エ-(エ)(オ)	観察法

「観点及び規準」については表13を参照。

(2) 具体的な実施カリキュラムの構造

「赤門学」を本校のカリキュラム及び総合的な学習の時間に具現化していく際の流れを図18に示す。「赤門学」は、「各教科・科目」「特別活動」「総合的な学習の時間」の3領域での実現を目指すものである。図18は、「先輩に学ぶ」のメインである「職場訪問」に焦点を当て、その単元内における「授業者」「学習内容」「生徒」「活動の場」「観点」「規準」の具体的関係を示した。今回の研究対象である「先輩に学ぶ」は、表12に示す「赤門学」の3つの柱の一つである「将来への設計図を描く」の第1歩として1年生に設定した。

表14に示す活動計画は、計画カリキュラムであると同時に実施カリキュラムでもある。本来、「計画・立案」(Plan)に該当する計画カリキュラムを「実施」(Do)に該当する実施カリキュラムへ移行する段階では、何らかの修正が必要であると考えていたが幸いにも計画カリキュラム通りに実施することができた。

なお、カリキュラム改善のための教師と生徒による評価については、主に「先輩に学ぶ」の全活動の前後に、アンケートを取るという形で行った。そのアンケート内容は、評価者である教師と生徒から見た「授業者」「学習内容」「生徒」「活動の場」「観点」「規準」の評価の変容を見取るものとし、表13に示した評価規準について、それぞれ4段階の基準で回答を求めた。

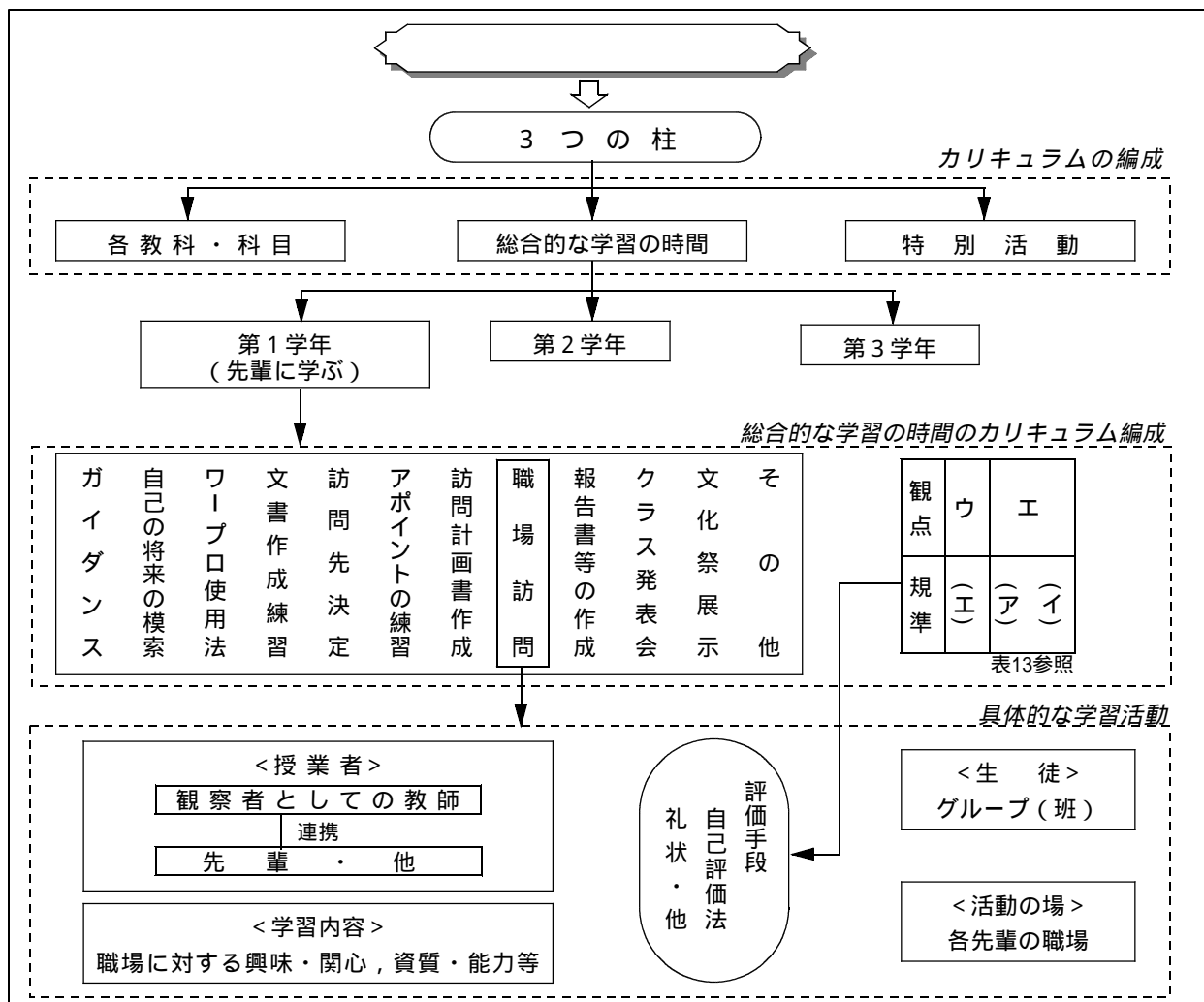


図18 本校における実施カリキュラムの流れ

4 カリキュラムの評価と改善

(1) 実施カリキュラムの改善点

アンケートの結果、生徒と教師ともに評価規準について実施後がよいと評価していた。このことから、「先輩に学ぶ」の活動を実際に行った結果、活動のねらい及び評価の観点・規準がほぼ達成されていたと言える。しかし、表15の から に関しては余りよくない評価を得た。

表15 生徒による評価の結果（教師による評価も含む）

<p>自分の将来の職業について関心をもっている。(観点ア「職業に関する関心，理解の深化」- (ア))</p> <p>先輩にどのような質問をするか考えることができる。(観点イ「自主的・創造的な活動意欲・能力」- (ウ))</p> <p>訪問する先輩にアポイントメントを取ることができる。(観点イ「自主的・創造的な活動意欲・能力」- (エ))</p> <p>訪問願いや礼状を発送するに当たって，事務的な処理がきちんとできる。(観点ウ「礼儀作法や社会常識を踏まえた態度」- (ウ))</p> <p>職務に必要な資質・能力・心構え等が理解できる。(観点エ「学習・活動内容をまとめ，発表する意欲・能力」- (イ))</p> <p>ワープロソフトを使って，訪問報告書の書式を作成することができる。(観点オ「パソコン・ワープロ活用技能」- (オ))</p> <p>前述したとおり，下記に示す3つの規準については余り良い評価を得ることができず，，活動の在り方に何らかの課題が残ったのではないかと考えている。</p> <p>訪問先の職務内容に関心がある。(観点イ「自主的・創造的な活動意欲・能力」- (ア))</p> <p>報告書の内容を積極的に発表しようとする意欲がある。(観点エ「学習・活動内容をまとめ，発表する意欲・能力」- (イ))</p> <p>報告書の内容を聴き手に分かりやすく発表することができる。(観点エ「学習・活動内容をまとめ，発表する意欲・能力」- (オ))</p>

(2) カリキュラムの検討

ア 「訪問先の職務内容に関心がある」に基づくカリキュラムの評価

総合的な学習の時間のカリキュラムにおいて、表14のこの単元の最初に行う「将来の夢の模索」「『進路と職業について』の研究」に問題があったと思われる。ここでは各生徒の訪問先をどのような方法で決定したかについて図19を念頭におき検討を加えた。

訪問先については、教師が鹿島市内を中心にリストアップし、生徒に提示した。結果として生徒の第1希望はほぼ尊重されたが、リストの作成に直接生徒がかかわる機会をつくるのが困難であった。このことが、訪問先自体の職務内容に関心を高めた生徒の数が少なかった要因ではないかと考えた。次年度の取組においては、訪問する先輩・職場の選定の初期段階から生徒が主体的にかかわる活動が必要であるとする。

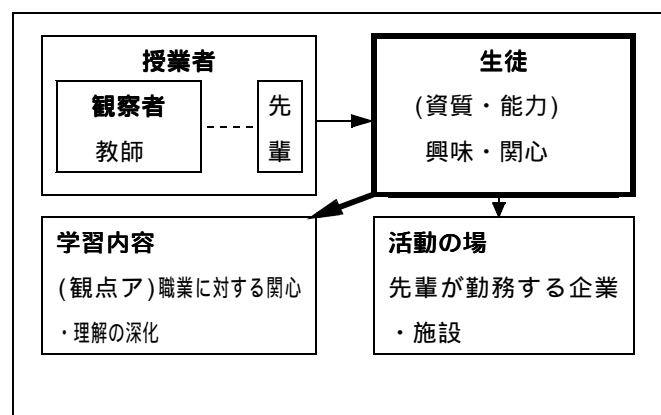


図19 生徒の関心を触発するための関係図

イ 「 報告書の内容を積極的に発表しようとする意欲がある」及び「 報告書の内容を聴き手に分かりやすく発表することができる」に基づくカリキュラムの評価

この2つについては、総合的な学習の時間の単元活動計画において、表14の「クラス発表会」での意欲及び発表時の言葉遣いなどに問題があったと考える。ここでは図20に示すとおり、教師が、生徒の意欲・向上心又は資質・能力への触発は適切であったか、学習・活動内容を聴き手に分かりやすいようにどのようにまとめるか、また、学習・活動内容を聴き手に分かりやすいようにどのような機器を有効に使ったか、更に発表時の言葉遣いや態度は適切であったかを検討する必要があると考えた。

まず、教師からの生徒の意欲・向上心又は資質・能力への触発の適性であるが、資質・能力については生徒が学ぶ内容が多岐にわたっているために、教師が直接指導することは困難である。そこで、生徒へは適性検査の活用、図書館やインターネットなどの情報の活用をする手段の紹介をする必要がある。

意欲については、本校の総合的な学習の時間のねらいである「生きる力」と密接な関係があると言える。これについては、1の(2)で実施前に予測したとおり自ら問題を意欲的かつ積極的に解決する力が欠けていると判断した。この力をはぐくむためには、社会が容認する形での個人の欲求の充足や個人の成長に高い倫理観を実現しようとする主体的態度を身に付けさせなくてはならないと考えた。

確かに「クラス発表会」は、クラス内で各班が発表する形で行われ、班員が全員壇上に上がり、一人一人が何らかの役割を果たすという計画の基に実施した。しかし、生徒全員が学習活動とその成果を責任もって発表する機会を保障することは、時間の都合上困難であった。そのために、発表に関しては主に携わった生徒とそうでない生徒との間で格差が生じ、結果として一部の生徒しか主体性を発揮できなかったようである。よって、本校において自ら問題を積極的に解決する力をもつ生徒を育てるために、「幼い頃の夢を思い出させ、その実現を図る手段を考えさせる」「他の生徒や先生、保護者などが認めるような個性を確立するよう触発する」「簡単に夢を諦めさせず、勇気付けをする」などの手立てが必要である。この手立てを基に共通理解の下、今後は生徒に接するべきであると考えた。また、次年度は生徒一人一人に表現の場を保障する発表会を企画するよう努めたい。学習・活動内容を聴き手に分かりやすいようにどのようにまとめることができるかについては、生徒に収集した内容をまず項目別に分類させることが必要である。そして、次に抽象的な内容でまとめさせ、一度全体的な内容を認識させなくてはならない。生徒にはそのまとめを説明させるとともに、聴き手に対しては必要な具体的内容を明示するよう指示したい。

機器についてはOHP、コンピュータ・ソフトによる提示などが考えられる。来年度はこれらの機器の紹介をするとともに、その使用法を教える機会を設けたい。

発表時の音声言語の使い方及び態度については、その在り方を明示する資料を配布することはもちろんであるが、新たに単元を起こし、文字言語とは違う発表時の言葉遣い、発表する時の速度や姿勢などについて学ばせる場を設けたい。これについては、総合的な学習の時間のカリキュラムに挿入すべきであると考えている。

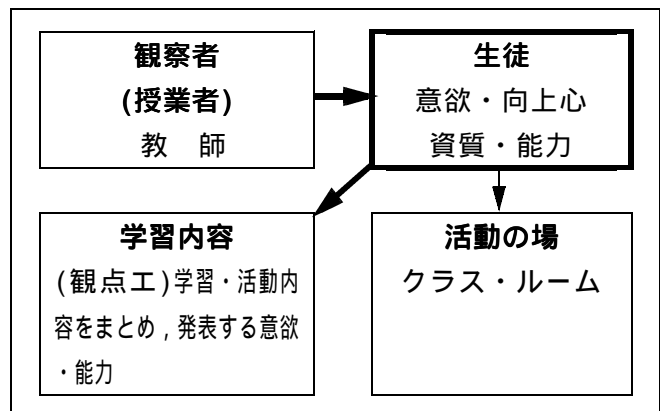


図20 生徒の意欲や表現能力を触発するための関係図

(3) カリキュラムの改善

前述した(2)の検討事項を受け、表16に示すように次年度の計画カリキュラムを作成した。生徒のアンケートや教師の意見や感想を取り入れ、検討したものであるが、日程や活動の場の検討が今後の課題である。

表16 「先輩に学ぶ」新活動計画

学 習 活 動	観点及び規準	評価方法又は対象
(企業・施設訪問のガイダンス)将来の夢の模索	ア-(ア)(イ)	アンケート
「進路と職業について」の研究	ア-(ウ)(イ)	進路ノート
CAI教室の使い方、ワープロソフトの利用	オ-(ア)(イ)	観察法
CAI教室の使い方、ワープロソフトの利用	オ-(ウ)(イ)(オ)	観察法
計画書・訪問願い・礼状・報告書等の作成練習	オ-(ウ)(イ)(オ)	提出書類
訪問希望先の希望調査 (ワープロソフトの練習)	イ-(ア)(イ)	アンケート
訪問する先輩・職場の選定(討論など)	イ-(ア)ア-(ア)(イ)	観察法
(班、訪問先の発表、役割分担決定)訪問計画書の準備	イ-(ウ)(オ)ウ-(ア)(イ)	訪問計画書
アポイント法の練習と実施、訪問計画書作成	イ-(ウ)(イ)ウ-(ア)(イ)	面接法・訪問計画書
訪問計画書の清書 (訪問願いの作成・発送)	ウ-(ア)(イ)(ウ)	訪問計画書
各班での日程づくりを中心とする最終打合せ・準備等	イ-(オ)ウ-(ア)	観察法
礼状の書き方練習 (グループ取材報告書の配布)	ウ-(ウ)(イ)	礼状
午後から職場訪問を実施、礼状の作成	エ-(ア)(イ)ウ-(イ)	自己評価法・礼状
「個人の感想文」作成 (グループ取材報告書作成開始)	エ-(ア)(イ)(ウ)	「個人の感想文」
取材報告書提出締切 (礼状<感想文・報告書を含む>発送)	エ-(イ)(ウ)ウ-(ウ)	取材報告書
音声言語の使い方や態度	エ-(イ)(オ)	観察法
クラス発表会	エ-(イ)(オ)	観察法
文化祭における報告書展示	エ-(イ)(オ)	観察法

「観点及び規準」については表13を参照。

5 実践事例のまとめと今後の課題

本研究では、まず「赤門学」からそれぞれの分類系を確認しつつ、第1学年の「先輩に学ぶ」の「職場訪問」まで検討してみた。さらに、その構成要素である「授業者」「学習内容」「生徒」「活動の場」「観点」「評価規準」について分析し、それを基にカリキュラムの評価をし、より充実したものとなるように再編成を行った。

「先輩に学ぶ」の活動は、本年度が初めての取組であったが、生徒や教師のアンケートから見る限りにおいては、そのねらい・観点はおおむね達成できたのではないかと考える。

実際に指導・援助に当たった教師へのアンケート結果を見てみると、「先輩に学ぶ」のねらいと本校の教育目標、赤門学の理念との間の整合性についても、肯定的な評価が出ている。評価の観点・規準に関しても「先輩に学ぶ」のねらい、教育目標の達成につながっているとの回答がほとんどであり、それは学校評議員、保護者、地域の人が求める観点となっているとの判断もなされている。

ただし、前述したように、訪問先の選定や成果の発表といった活動のスタートラインとゴール地点において、生徒の意欲的かつ積極的に問題解決する力がどの程度保障され、発揮されたかという点では課題が残った。この点については、今後のカリキュラム改善で克服しなければならない。

生徒の訪問を心よく受け入れ、対応・指導をくださった本校の先輩諸氏から、こうした機会を設けたことを逆に感謝されることもあった。普段改まった場で高校生を指導をする機会は少ないが、かわいい後輩が頼ってきた場合には、全力でサポートするという諸先輩の気概も伝わってきた。大変ありがたいことである。学校の外にもこうした先輩をはじめ、多くのサポーターが存在していることを我々は改めて認識した。こうした力添えをありがたく大事に生かしながら、今後も「先輩に学ぶ」のカリキュラム改善を進め、生徒の「生きる力」の育成に力を注いでいきたい。

第3章 総合的な学習の時間のカリキュラム評価の実際

専門高校における総合的な学習の時間のカリキュラム改善

- 国際交流科における海外修学旅行のカリキュラム評価を通して -

佐賀県立高志館高等学校

1 研究の取組

(1) 学校の概要

本校は、佐賀県の中央部にある佐賀市に隣接する佐賀郡大和町にあり、平成15年度には学校創立70周年記念を迎える全日制の農業系専門高校である。平成6年度に普通科系学科である国際交流科を新設し、校名を「佐賀農芸高等学校」から「高志館高等学校」に改めた。(園芸工学科、緑地土木科、食品流通科、国際交流科の4学科各学年1クラス)の中規模校であり、平成13年度末には、進学、就職それぞれ70名弱の進路状況となっている。

校名変更を機に掲げた校訓「高志潔心」の下、本校では3つの教育方針を立てている。「情緒豊かな人材の育成」「社会に寄与できる人材の育成」「国際感覚に優れた人材の育成」がその具体的方針である。さらに、これらの教育方針を受けて、次の5つの教育目標を掲げている。

高い目標を持ち、目標達成に向けて邁進する態度と潔い心を養う。

進展する社会に主体的に対応できる、次の世代の担い手を養う。

自主自立の精神と進取の気概を養う。

広い知識と正しい判断力を養う。

他人を敬愛する心、思いやりと共同の精神を養う。

さらに、国際交流科では「外国語(主に英語)の理解を深め、外国語で積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てる。また、外国の言語や文化に対する関心を高め、外国語を使用して、国際理解を図ることのできる人材を育成する」「国際交流活動を通して、広く外国を理解するとともに、日本を再認識し、日本文化を外国人に伝えることができる人材を育成する」という2つの目標を打ち出している。

これらの分類系は図21に示すとおりである。

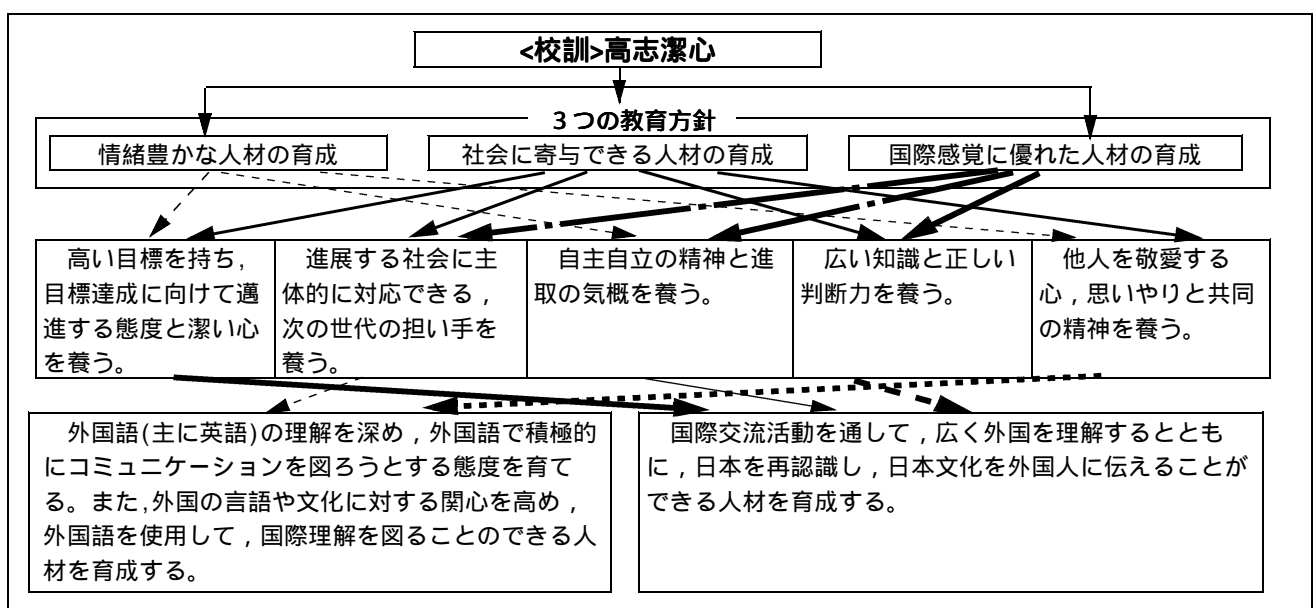


図21 本校における国際交流科の目標までの流れ

(2) 国際交流科の総合的な学習の時間

国際交流科における総合的な学習の時間の目標として、国際交流科における2つの目標を受け、「外国語を中心とした専門教育と連携して現代の国際社会に対応できる資質や能力を養うとともに、国際的な感覚や視野を身に付けさせる」ことを目標としている。本科においては、すべての学年において総合的な学習の時間を実施しているために、表17のような学年別テーマを設定した。

図22に示すように、義務教育の段階では「地域」（生活圏内）における自己理解はしているものとしている。

そこで、本校の国際交流科において、1年次では、義務教育で学んだことを踏まえ、表17に示すように「アイデンティティの拡充を図る学習活動」をテーマに、「日本や佐賀の文化理解と自己発見」を副題としてその達成を図った。図22に示すように、セルフ・アイデンティティを「生活圏内の自己」から「佐賀県人」へと拡大させるためである。他県へ進学若しくは就職すれば、自ずとそれは認識されるものであるが、県内に居住しているうちに地歴・公民科と連携して認識を高めさせたいと考えている。

表17 総合的な学習の時間の学年別テーマ

1年次	アイデンティティの拡充を図る学習活動 - 日本や佐賀の文化理解と自己発見 -
2年次	相補的アイデンティティの拡充を図る学習活動 - 海外修学旅行の準備と体験学習 -
3年次	自己の在り方・生き方を図る学習活動 - 国際社会における自己実現 -

2年次ではまず、セルフ・アイデンティティのエリアを「佐賀県人」から「日本人」にまで拡大させることをねらいとした。ただ、「佐賀県人」はともかく「日本人」であることを日常生活の中で実感することは難しい。それを実感させるには、実際に生徒を日本の外に連れ出し、外から日本人を見せなければならない。この相補的にアイデンティティを高める手立てから、テーマを「相補的アイデンティティの拡充を図る学習活動」、副題を「海外修学旅行の準備と体験学習」とした。これには生徒の関心・意欲・態度やコミュニケーション能力を触発する手立てとしての準備期間も含めた。なお、この2年次が具体的な研究の対象である。

3年次では、国際交流科の生徒が国際社会へ卒業後に飛び出すことを想定し、グローバル・パースペクティブ、つまり世界的視野をもって自己の在り方生き方について考えさせ、その自己実現をすることをねらいとした。そこで、テーマを「自己の在り方生き方を図る学習活動」、副題を「国際社会における自己実現」とし、その達成を図ることとした。

なお、学習指導要領の総合的な学習の時間のねらいでは、特に高等学校において「在り方」を強調していることもこのテーマを設定する上で考慮した。

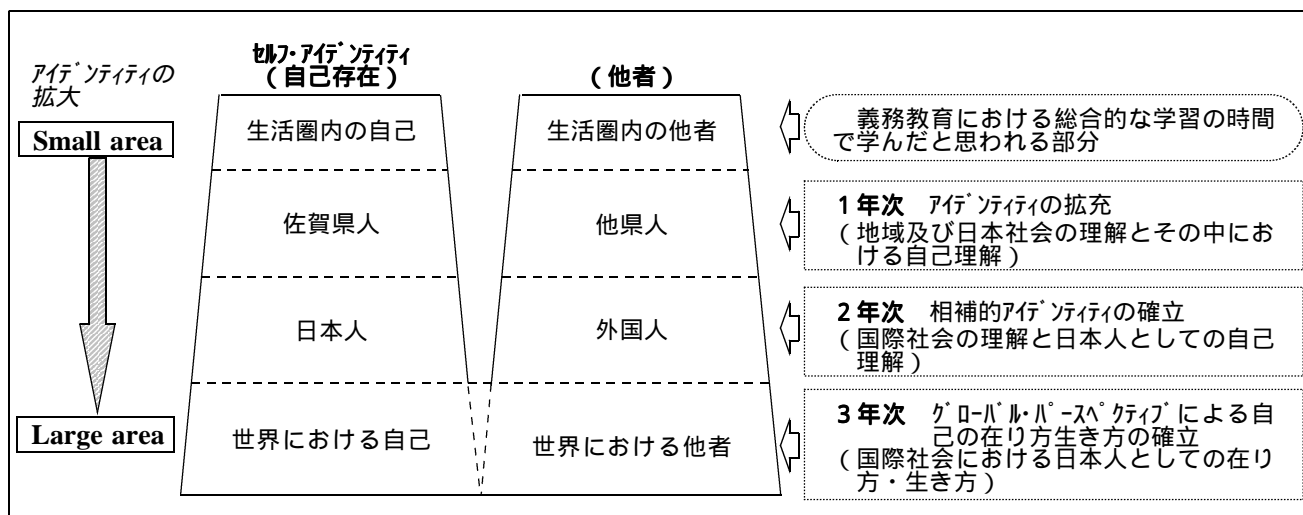


図22 本校におけるアイデンティティの拡充の段階と分類系

(3) 国際交流科2年次における総合的な学習の時間の取組

本校国際交流科では、学校全体の教育目標並びに学科の目標を達成するため、学科設置当初より海外修学旅行を計画し、実施してきた。その行程の中での目玉をホームステイとし、英語圏の家庭に入って直に英語でコミュニケーションを取ることが自己の力を試すことにつながり、同時に英語力上達の最大の動機付けにもなる。また、ボランティアの家庭にホームステイすることによって、自主自立の精神や広い知識と正しい判断力、更に思いやりと協同の精神を身に付けることができるのではないかと考えた。国際交流の活動をする時、他国文化を理解するだけでは国際交流とは言えない。自国文化を理解し、外国に向かってそれを発信し、お互いの理解を高めていくことが真の国際交流につながると言える。生徒一人一人のホームステイで伝えられる日本文化はあろうが、伝統芸能となると一人では表現しがたいものがある。団体活動の中でお互いの文化を伝え合うという意味合いで、学校間文化交流を計画した。この交流は、1年次から学んできた柔剣道の型であるとか、日本の伝統的な遊び、邦楽、日本舞踊、書道、御伽噺、折り紙など、一人では伝えにくい文化を団体交流活動の中で披露するものである。

なお、本校では上記のような活動を現地で生徒に実践させるため、平成11年度までは海外修学旅行の前準備という形でクラス担任がホームルーム活動や教科担当の授業、放課後の時間などを利用して行ってきた。この準備を受けた海外修学旅行の体験が、最終的に生徒一人一人の「生きる力」に結び付くと本校では考え、平成12年度より「国際理解」の科目を総合的な学習の時間に充当してきた。

本年度は、総合的な学習の時間に対する取組を実践して3年目ということで、まとめの年であると言える。しかし、その学習活動の対象であった現3年生は、昨年度の9月に発生したテロ事件のため、海外修学旅行に行けないという状況となり、本校国際交流科にとっても総合的な学習の時間の中心に考えていた2年次の学習活動が抜けたのが残念であった。そこで、本年度の研究の対象を現2年生に切り替え、学習活動の問題点を明らかにしてカリキュラム改善の方策を探ることとした。

なお、2年次の活動の中心は「海外修学旅行」であることは言うまでもないことだが、そのための準備又は事後の発表や「海外修学旅行」で得た能力を生かした外国人との交流会なども重要な活動であると考え、カリキュラムを編成した。実施については計画通り進めることができたので、実施カリキュラムを次に掲載する。

2 活動の実際

(1) 2年次における実施カリキュラム

2年次では表18に示すように、2学期のカナダへの「海外修学旅行」を中心に総合的な学習の時間を計画したが、前述のように「海外修学旅行」の前には、「カナダレポート」(修学旅行先の事前研究)、「日本や佐賀のトピック選定と研究」(日本や佐賀の紹介内容の選定と伝達の手立て)、「My Albumの作成」(ホームステイ時の自己紹介用)など、様々な準備を行う。また、「海外修学旅行」の後でも「イングリッシュセミナー」(「海外修学旅行」で伝達できなかった内容や英会話力の補強学習)、「カナダレポート発表会」(カナダで学んだことの確認、発表の手立て、他者の発表に対する評価)、「佐賀大学留学生との交流会」(「海外修学旅行」で得た能力の実践力向上)、「国際理解講演会」(海外に対する一流の識者による啓発)も事後の活動として位置付けた。

総合的な学習の時間のねらいは、表17のテーマに基づいた以下の4つだが、ここではメインである「海外修学旅行」に焦点を当て、特に「海外修学旅行」で達成すべきものに下線を引いた。

意欲的に協力して「海外修学旅行」に向けての情報を収集し、活用することができる。

集団生活を通して社会人としての自覚を高め、国際社会の中における自己を考えることができる。

異なった歴史や文化を意欲的に学び、21世紀に生きるための国際感覚を身に付ける。

「海外修学旅行」で身に付けた能力を適切に活用し、自己理解を深めることができる。

表18 2年次における総合的な学習の時間の実施カリキュラムと観点

実施時期	活動(単元)計画	観 点
1 学期	1. オリエンテーションと班分け	関心・意欲・態度, コミュニケーション能力
	2. カナダレポート	関心・意欲・態度, 他者理解能力, 情報活用能力, 自己表現能力
	3. 日本や佐賀のトピック選定と研究	関心・意欲・態度, 自己認識能力, 情報活用能力
	4. My Albumの作成	自己探求能力, 情報活用能力, 情報集約能力, 自己表現能力
2 学期	5. 学校間交流校との事前交流	関心・意欲・態度, 他者理解能力, 情報集約能力
	6. 海外修学旅行(カナダ)	(観点1)関心・意欲・態度, (観点2)自己評価能力 (観点3)コミュニケーション能力, (観点4)情報収集能力
3 学期	7. イングリッシュセミナー	関心・意欲・態度, 自己表現能力, 情報活用能力, 他者理解能力
	8. カナダレポート発表会	自己表現能力, 相互評価能力, 情報活用能力
	9. 佐賀大学留学生との交流会	自己表現能力, 自己評価能力, 情報活用能力, 他者理解能力
	10. 国際理解講演会	国際理解能力, 自己表現能力

(2) 「海外修学旅行」の実施カリキュラム(日程)と評価の観点及び評価規準

カナダへの「海外修学旅行」については、前述したとおり特別活動と総合的な学習の時間の区分けを、総合的な学習の時間に該当する時間をゴシック体及び太字で示すことによって区別し、表19に示している。評価の観点については、本校の総合的な学習の時間のねらいと表18に基づいて分類したが、「活動の場」が異なるためにそれぞれに設定した。また、評価規準についても同様に「活動の場」が異なるために、同じ観点であっても、それに応じたものを設定した。

ここでは表19の「カナダへの『海外修学旅行』の日程表と評価の観点及び規準」を「海外修学旅行」の実施カリキュラムとする。

表19 カナダへの「海外修学旅行」の日程表と評価の観点及び規準

1 日目	学校 福岡 台北 バンクーバー 《他国の環境と生活を学ぶ》 プリティッシュ・コロンビア大学見学 「観点1」 関心・意欲・態度 (規準)大学の構内で歴史や文化などについて意欲的に学ぶことができる。 「観点3」 コミュニケーション能力 (規準)大学内のカフェテリアで的確に注文して食事をする事ができる。 ガストタウン散策 スタンレーパーク及び水族館見学 キャピラノ渓谷、魚類の孵化場見学
2 日目	《他国文化の研究と同世代交流》 地域調査 「観点4」 情報収集能力 (規準)自らのテーマに基づいて情報を的確に収集し、世界的視野から対象をとらえることができる。 学校間文化交流 「観点1」 関心・意欲・態度 (規準)同世代の外国人との交流において、異なった歴史や文化を意欲的に学ぶことができる。 (規準)同世代の外国人との交流において、積極的に参加し、適切な態度で表現することができる。 「観点3」 コミュニケーション能力 (規準)外国人との集団的交流において、相手の伝達内容を自国文化と比較しながら理解できる。 (規準)自分たちの伝えようとするを、その場に応じた手段で理解させることができる。 ホストファミリー対面式 「観点2」 自己評価能力 (規準)新たな環境を的確に把握し、ホームステイ前の自分を適切に評価することができる。 「観点3」 コミュニケーション能力 (規準)相手の伝達内容を的確に理解し、質問内容を適切に伝えることができる。 (規準)自分の伝達内容をその場に応じた手段で理解させることができる。
3 日目	《大自然と環境を考える》 ウィスラー見学 「観点1」 関心・意欲・態度 (規準)大自然に対して積極的にかかわり、環境について発展的にとらえることができる。 「観点4」 情報収集能力 (規準)現地での説明等から情報を的確に収集し、世界的視野から対象をとらえることができる。
4・5 日目	《他国文化の中における自己の在り方》 ホームステイ 「観点1」 関心・意欲・態度 (規準)ホストファミリーに対して積極的にかかわり、個人的に交流を深めることができる。 (規準)地域から情報を的確に収集し、意欲的に行動することができる。 「観点2」 自己評価能力 (規準)新たな環境を的確に把握し、そこでの自分の考えや態度を適切に評価することができる。 「観点3」 コミュニケーション能力 (規準)ホストファミリーの伝えようとするを理解し、異文化に対して適切に対応できる。 (規準)My Album等を用い、自分の伝えようとするを適切に理解させることができる。
6	バンクーバー 台北 福岡 学校

3 カリキュラムの評価と改善

(1) 実施カリキュラムの分析

今年度の「海外修学旅行」の「活動の場」はカナダであったが、今後の国際情勢や旅行者との交渉を考えた場合、来年度以降は他の国になることも十分予想される。よって、今後のことを考えた場合、表19のような具体的な実施カリキュラムでは応用がし難い。そこで、ここでは「活動の場」を一般化させるとともに、「学習内容」(学習目的)「授業者」「生徒」「観点」について改めてそれらの関係を整理してみた。表20はその分類系である。なお、今年度の具体的な活動に関しては、表19の内の数字で「活動の場」の中に入れ、観点についてもそれに準じるとともに、「授業者(観察者)」「生徒」の観点と規準に基づいたアンケート等の集約を「 $\cdot \cdot \cdot \times$ 」で示した。「 \cdot 」は高い割合で達成したと思われるもの、「 \times 」はほとんど達成したと思われるもの、「 $\cdot \cdot \cdot$ 」はその中間のレベルのものである。

「活動1」の文化的施設では現地で過ごすための基本的知識について意欲的に学ばせ、「活動2」では「活動1」で学んだ知識等を応用し、事前に用意したテーマに基づいて自由な行動をさせるという目的がある。「活動3」では親しみやすい同世代から異文化を学ばせるとともに、他の生徒と共同で情報を意欲的に発信させることが主な目的である。「活動4」は「活動6」ホームステイの事前活動であり、互いに紹介し合った後に一晩だけホストファミリー宅に宿泊させるが、一旦集めるのはホームステイする上で不都合な点等がなかったかを確認するためである。「活動5」では最も国際的視野でとらえやすい環境問題について考えさせる。最後の「活動6」のホームステイは、異文化に生活の中で直接触れさせることによって日本人としての自己存在等を改めて認識させるという目的がある。

表20 「海外修学旅行」の分類系

	活動の場	学習内容(学習目的)	授業者(観察者)	生徒	観点
活動1	外国の文化的施設	該当地の文化的施設において文化や歴史等を意欲的に学ぶとともに、基本的な生活習慣を習得することができる。	(観察者) 教師	「観点1」 「観点3」	「観点1」関心・意欲・態度 「観点3」コミュニケーション能力
活動2	外国における自由行動可能な場	該当地で自らのテーマに基づいて情報を収集し、世界的視野から対象をとらえることができる。	(授業者・観察者) 教師	「観点4」	「観点4」情報収集能力
活動3	外国の学校	該当する学校で意欲的に異なる文化を学ぶとともに、積極的に自国文化を伝えることができる。	(授業者・観察者) 教師 <日本と該当校の教師>	「観点1」 「観点3」	「観点1」関心・意欲・態度 「観点3」コミュニケーション能力
活動4	ホストファミリーと対面をする場	ホストファミリー宅の環境を的確に把握するとともに、適切に情報をやり取りすることができる。	(観察者)教師 (授業者)ホストファミリー宅の一員	「観点2」 「観点3」	「観点2」自己評価能力 「観点3」コミュニケーション能力
活動5	大自然を感じさせる場	大自然に意欲的に接し、必要な情報を的確に得ることによって環境問題を世界的視野からとらえることができる。	(観察者) 教師 (授業者) 現地説明者等	「観点1」 「観点4」	「観点1」関心・意欲・態度 「観点4」情報収集能力
活動6	ホストファミリー宅	他国のホストファミリーと積極的に接することによって、適切に交流し、自己を見つめ直すことができる。	(観察者) 教師 (授業者)ホストファミリー	「観点1」 「観点2」 「観点3」	「観点1」関心・意欲・態度 「観点2」自己評価能力 「観点3」コミュニケーション能力

(2) 実施カリキュラムの問題点

「海外修学旅行」後のアンケートの結果に関しては、前項の表20に簡略化して示したが、出発前と比較して「良かった」という意見に変わった生徒が増えており、中でも「非常に良かった」という生徒が倍増していた。理由としては、これまでの修学旅行と違い、「二人一家庭」という形態から「一人一家庭」という形のホームステイに変わったため、出発前に生徒は不安を抱いていたことが挙げられる。

ホームステイに関しては、英語によるコミュニケーションがうまく取れたとは必ずしも言えないが、ホストファミリーと共に良い体験をし、英語の学習の必要性や日本人としての自己を直に感じ取ってくれたようである。いずれにしても全般的に生徒に対するアンケートの結果が出発前と比べてよくなっているのは特筆すべきである。

ただ、表19の「ホストファミリー対面式」のアンケートの集計結果において、観点2の自己評価能力の評価規準「新たな環境を的確に把握し、ホームステイ前の自分を適切に評価することができる」、観点3のコミュニケーション能力の評価規準「相手の伝達内容を的確に理解し、質問内容を適切に伝えることができる」、「自分の伝達内容をその場に応じた手段で理解させることができる」については生徒、教師ともに不評であったのが今後の重要な検討課題である。

そこで、この「ホストファミリー対面式」に対する改善が来年度以降必要となってくる。

(3) 実施カリキュラムの評価

「海外修学旅行」の「ホストファミリー対面式」での問題は、予定した場に、ホストファミリーの一部が仕事等の都合で来ることができなかったことである。来ても時間がまちまちで、一斉に行くことはできなかった。対処法としては、ホストファミリーが来なかった生徒は近隣のホストファミリーに連れて行ってもらうことにしたが、いきなり一人でホストファミリーと接する生徒は、より不安が大きかったようである。このことは観察者である教師側からもアンケートによって指摘があり、事前に用意した評価の観点や規準をすべての生徒に生かすことができなかった。

そこで、この解決法として表19の「学校間文化交流」において、そこに在籍する生徒の家をホストファミリーとすることを考えた。そうすれば「ホストファミリー対面式」も一斉に行うことができ、海外での貴重な時間を有効に使うことができる。しかも、ホストファミリーの一員に全員が事前に接することができるのである。ただ、この問題は評価の観点や規準に直接関係しているものではないために、図23に示すような解決法となった。

「学習内容」やそれに準ずる観点や規準は、表19において示すものと同じである。授業者又は観察者については本校の教師のみならず、該当校の教師の協力を得られたことは思わぬ副産物となった。「活動の場」は必然的に該当校の体育館やそれに代わる広い教室となる。

問題点としては、ホストファミリーの一員である該当校の生徒と一緒にホストファミリー宅に向かう場合の交通手段と安全の確保、該当するホストファミリーの一員である該当校の生徒以外の生徒への対処法が挙げられる。しかし、この解決については該当校の教師や生徒との密なるEメール、手紙等の連絡や交流によって解決されると思う。

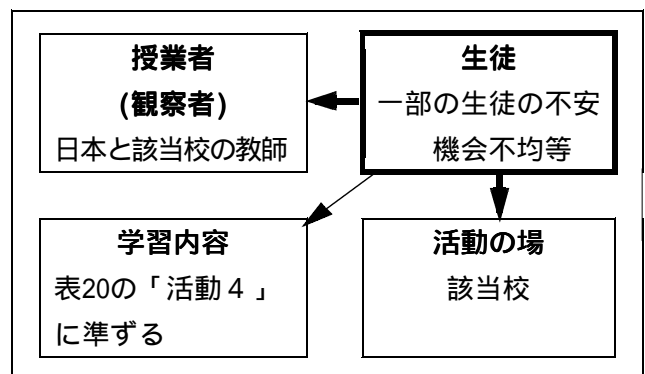


図23 生徒の不安や機会均等をねらう関係図

(4) カリキュラムの改善

前述した(3)「実施カリキュラムの評価」を受け、表20を基にして「海外修学旅行」のカリキュラムを改善すると表21のようになる。「活動の場」が「活動3」「活動4」ともに外国の該当校となるのである。なお、表18に示した「5. 学校間交流校との事前交流」はこの変更点を受けて、生徒同士の交流も含まれることになる。このことは観点の1つである「コミュニケーション能力」の向上にもつながると期待される。

表21 改善した「海外修学旅行」の分類系

	活動の場	学習内容(学習目的)	授業者(観察者)	生徒	観点
活動1	外国の文化的施設	該当地の文化的施設において文化や歴史等を意欲的に学びとともに、基本的な生活習慣を習得することができる。	(観察者) 教師	「観点1」「観点3」に基づく目標達成	「観点1」関心・意欲・態度 「観点3」コミュニケーション能力
活動2	外国における自由行動可能な場	該当地で自らのテーマに基づいて情報を収集し、世界的視野から対象をとらえることができる。	(授業者・観察者) 教師	「観点4」に基づく目標達成	「観点4」情報収集能力
活動3	外国の学校	該当する学校で意欲的に異なる文化を学ぶとともに、積極的に自国文化を伝えることができる。	(授業者・観察者) 教師 <日本と該当校の教師>	「観点1」「観点3」に基づく目標達成	「観点1」関心・意欲・態度 「観点3」コミュニケーション能力
活動4		ホストファミリー宅の環境を的確に把握するとともに、適切に情報をやりとりすることができる。	(観察者)教師 (授業者)ホストファミリー宅の一員	「観点2」「観点3」に基づく目標達成	「観点2」自己評価能力 「観点3」コミュニケーション能力
活動5	大自然を感じさせる場	大自然に意欲的に接し、必要な情報を的確に得ることによって環境問題を世界的視野からとらえることができる。	(観察者) 教師 (授業者) 現地説明者等	「観点1」「観点4」に基づく目標達成	「観点1」関心・意欲・態度 「観点4」情報収集能力
活動6	ホストファミリー宅	他国のホストファミリーと積極的に接することによって、適切に交流し、自己を見つめ直すことができる。	(観察者) 教師 (授業者)ホストファミリー	「観点1・2・3」に基づく目標達成	「観点1」関心・意欲・態度 「観点2」自己評価能力 「観点3」コミュニケーション能力

4 実践事例のまとめと今後の課題

今回の研究は、「高志潔心」という校訓から3つの「教育方針」、5つの「教育目標」、国際交流科の2つの「目標」へと下位部へ下ろし、更に3年間の総合的な学習の時間の「学年別テーマ」、2年次におけるカリキュラム、「海外修学旅行」へと焦点化させてたどってみた。

まず、校訓から国際交流科の2つの「目標」へとたどることは、本校の教育目標を確実に達成する上で不可欠であり、校訓を具体的に身に付ける上で有効な手立てだったと言える。また、カリキュラムを改善する上で「活動の場」「学習内容」「授業者(観察者)」「生徒」「観点(規準を含む)」に区分して考えることは、整合性を確認する上で有効であったと言える。

ただ、前述したとおり次の「海外修学旅行」の「活動の場」がまだ決定しておらず、そのために具体的な「活動の場」に応じた評価の観点に基づく評価規準を設けることができなかつた。今後、早急に具体的な「活動の場」を決定し、それに対応した評価規準を設定したい。さらに、その上で校訓からもう一度具体的な活動までたどるとともに、それらの分類系を作成したい。そして生徒が「海外修学旅行」で体験したことを生かし、自国及び他国の文化理解、人間理解および国際協調に関心を持ち、豊かなコミュニケーション能力が身に付くようなカリキュラムを作成していきたい。